

BOOK REVIEW

Reconsidering the Establishment of American Indian “Tribes” in the U.S.

(米国における先住民「部族」の形成過程——
先住民のあり方を考えるきっかけとして)

Reviewed by Yuka Mizutani*

BOOK REVIEWED: 野口久美子著『カリフォルニア先住民の歴史——「見えざる民」から「連邦承認部族」へ』(*California Indian History: From the Invisible to Federally Recognized Tribe*) 彩流社、2015年。

1934年のインディアン再組織法によって米国連邦政府が規定した先住民の集団単位である「部族」は、「民族」と同義ではない。そのために、現代の米国先住民について論じる場合、複数の先住民族によって「部族」が構成されていたり、1つの先住民族が複数の「部族」に分割されていたりするという事情は、広く理解されているとは言い難い。カリフォルニア州のトゥールリヴァー部族を事例として、連邦政府の規定に基づいたいわゆる近代的な「部族」が形成されていく過程を描いた本書は、「部族」の実態について知ることでできる日本語で書かれた貴重な資料の1つである。

混乱のないように先に記しておく、本書および本稿中の「トゥールリヴァー部族」とは、連邦政府が規定した「部族」という単位に基づく集団である。そして「ヨークト諸部族」とは、連邦政府による「部族」の単位ではなく、先住民の伝統的な文化や言語に基づく集団である。そして、トゥールリヴァー部族は、1873年に大統領令で設立されたトゥールリヴァー保留地に集められた多様な先住民部族（連邦政

* 水谷 裕佳 Associate Professor, Center for Global Discovery, Sophia University, Tokyo, Japan.

府の規定する「部族」ではない)の子孫から成っており、その中心となっているのがヨクート諸部族である。

ヨクート諸部族とは、ヨクート語を伝統的な言語としつつカリフォルニア州中部のサンホワキン・ヴァレー周辺に居住してきたおよそ50の先住民集団の総称である。さらに、パイユートやチュバチュラバルなど、ヨクート諸部族でない先住民部族も、今日のトゥールリヴァー部族を構成している。このように書くと、本書が取り上げたトゥールリヴァー部族は異なる部族の寄せ集めによって形成された特殊な部族で、部族の人々は同一のアイデンティティを共有していないかのように聞こえる。しかし実際には、現在米国領土内に560以上存在する諸「部族」は、トゥールリヴァーの例に勝るとも劣らない複雑な背景の下に成り立っている。さらに、当初はいわば人工的に作られたとはいえ、時を経るにつれて、「部族」としての集団的アイデンティティを共有するに至っているのが、現在の米国先住民「部族」である。

以下に、各章の内容を簡単に説明する。

「はじめに」では、「部族主義」の概念が解説されている。著者の野口は「部族主義」を「部族の変質と先住民、合衆国双方からの部族の戦略的脱構築、そして『部族』の構築と承認を経て、最終的には、『部族』を基盤とした先住民の復権へと帰結する一連の動き」(12頁)だと定義している。著者によると、それは「現代の先住民社会における復権運動の基盤」(13頁)でもある。また著者は、米国において周縁化されることの多い先住民の中でも、特にカリフォルニア州内の部族は、政治と学術研究において不可視化されてきたと述べている。

第一章では、まず、米国における歴史学と先住民研究の関連性がまとめられている。そして本書において、筆者は1960年代以降複合領域として発展してきたネイティブ・アメリカン・スタディーズ(NAS)の観点を重視しながらも、NASに向けられてきた批判にも答えようとしたことが記されている。NASに向けられてきた批判とは、同分野の中で「部族」や「部族主義」といった概念が所与のものとされ、それ自体の成立過程や構造が十分に検討されていないことである。

第二章では、条約締結期(1775年～1871年)と再組織法期(1934年～)を経てインディアン局による部族査定期(1970年代～)に至る、米国先住民政策の変遷が簡潔にまとめられている。さらに、カリフォルニア州の先住民文化や社会についての解説がなされた上で、トゥールリヴァー部族の中心となっているヨクート諸部族の文化、社会、歴史が紹介されている。

第三章では、スペイン領、メキシコ領、および米国領時代のカリフォルニアにおける先住民の位置づけが論じられている。ヨクート諸部族の歴史的経験から考えると、スペイン領時代のカリフォルニアに多く設立されたキリスト教伝道所は先住民に対する文化的抑圧の場であり、先住民は伝道所の運営のための労働力であった。よって同時代の先住民は、伝道所を抜け出して、入植者のいない内陸部で隠れて生活するようになった。メキシコ領時代には、先住民の伝道所からの解放と経済的自立が政府によって定められた。しかし現実的には、先住民は農場や牧場で賃金労働者となるか、まだ入植者の少なかった内陸部に移住して生き延びるしかなかった。米国領となったカリフォルニア州内では実質的に先住民の奴隷制が制度化されていたために、彼らは労働者としてさらに搾取されるようになった。その上、連邦政府と先住民部族の間の条約締結はことごとく失敗した。故に、カリフォルニアでは「個々の先住民は存在しても、それらが属する社会基盤である部族の存在は完全に忘却され」（108頁）カリフォルニア先住民の政治的権利と法的地位は失われた。

第四章にまとめられているのは、連邦政府の主導によるトュールリヴァー・ファーム（ファームとは当時のカリフォルニアにおける保留地の一形態である）へのヨクート諸部族および他の先住民部族の移住と、同ファームから現在のトュールリヴァー保留地への移住の過程である。およそ192平方キロメートル（4万8千エーカー）のトュールリヴァー保留地の大半は山間部の傾斜地であり、耕作できる土地は少なかった。そのため、トュールリヴァー・ファームに居住していた先住民は現在の保留地への移住をためらった。結果として、連邦政府インディアン局が、武力をもってそれらの先住民を半ば強制的に現在の保留地に移動させた。

第五章で筆者は、まず、トュールリヴァー保留地で展開された同化政策について解説した。その具体的な内容としては、(1)キリスト教の布教を通じた西洋的価値観と慣習の浸透、(2)西洋式学校教育の導入、(3)保留地の解体を目的とした土地政策、の3点が挙げられる。また、複数の部族から構成されたトュールリヴァー「部族」の人々は、それぞれの部族アイデンティティを保つ一方で、保留地を基盤とした独自のアイデンティティを形成し、その両者を合わせ持つて行くようになっていった。

第六章では、1934年に成立したインディアン再組織法がトュールリヴァー部族にもたらした変化が述べられている。当時カリフォルニ

アの先住民が置かれていた状況には、米国の他の地域の先住民とは異なる点もあった。よって、カリフォルニアの先住民に対しては同法を適用するべきでない、という意見も聞かれたようである。従って、トゥールリヴァー保留地では、同法の定める「部族」の形態を取るようになるべきか、保留地内の住民が投票を行った。賛成票が多かったことを受けて、トゥールリヴァー部族は同法が定める通り、独自の憲法と部族政府を備えた「部族」へと変化した。なお、著者は、所有する家畜数を原因として保留地内で生じていた経済格差が解消されないまま部族としてのスタートを切った点を指摘している。

「おわりに」では、「部族」や「部族主義」の概念が経済発展と緊密に関わり合いながら変化している近年の動向がまとめられている。先住民カジノ産業が1980年代末から盛んになったことに伴い、1996年にトゥールリヴァー部族もカジノ産業に参入し、その収益は部族に属する人々への分配金や、近隣部族への支援金、そして同部族の所有地拡大のための資金として使われるようになった。それは、「『部族』がアメリカ社会の中で一定の政治的、経済的、社会的パワーを持ち始めている」(198頁) ことの現れの一部であろう。最後に、著者は、米国先住民史や米国史の中での本書の貢献を、(1)「『部族』が、『部族主義』という先住民と合衆国の歴史的関係の中で構築されたものであるということを確認した」(200頁) 点、(2)「『部族主義』が先住民と合衆国の歴史的関係を表すのみならず、それ自体が合衆国による先住民の統合理論であることを確認した」(200-01頁) 点、(3) トゥールリヴァー部族の歴史を辿ること自体が「これまで学問的に不可視化されてきた多くの先住民史の一部を掘り起こす作業」であった点、の3点にまとめている。

私が調査地としてきたアリゾナ州は、カリフォルニア州に接している。現在のアリゾナ州には、全米第一の広さのナバホ保留地(約6万平方キロメートル)と、第二の広さのトオノ・オータム保留地(約1万1200平方キロメートル)を含む、およそ8万平方キロメートルの保留地が残る一方で、カリフォルニア州には2100平方キロメートルほどの保留地しかない(U.S. Forest Service: D-2, D-3)。アリゾナ州の土地は約29万4千平方キロメートル、カリフォルニア州の土地は約40万3千平方キロメートル(U.S. Census Bureau: 368, 370)であることを考慮すると、カリフォルニア州における保留地の少なさがさらに際立つ。アリゾナの大部分を占める乾燥地帯が入植者の興味を惹かなかった一方で、カリフォルニアは水や資源に恵まれ、入植者から見て

耕作地に適した土地も多かった。多様な先住民文化を育んできたカリフォルニアの豊かな土地が、ヨクート諸部族を含む先住民の伝統的社会的形態の解体を引き起こす原因ともなったことは、皮肉としか言いようがない。

著者が検討を試みた「部族」は、一旦解体された後、連邦政府の価値観に基づいて再構成された集団である。しかし、トュールリヴァー部族は、連邦政府の定めた「部族」の枠を自ら破ろうとしている最中であるように見える。例えば、本書には、同部族がカジノによって得た利益の一部が、チュバチュラバル部族への支援に充てられていることが記されている（198頁）。チュバチュラバルは、トュールリヴァー部族を構成する諸部族の1つでもある。つまり、チュバチュラバル部族への支援は、トュールリヴァー部族が伝統的な言語や文化を基盤とした集団を再構築する試みの一環だと捉えることもできよう。著者は、「部族主義」を「最終的には、『部族』を基盤とした先住民の復権へと帰結する一連の動き」（12頁）と定義しているが、この文脈中の「先住民の復権」とは「連邦政府の定義した先住民のあり方からの脱却」であり、その一例が上記のような伝統的集団単位の再構築なのかもしれないと私は考える。このように、トュールリヴァー部族の形成過程を追うことによって、読者に米国内の先住民の将来的なあり方を考えるためのヒントを与えることが、本書の学術的な貢献であろう。

参考資料

- U.S. Census Bureau. “2010 Census of Population and Housing, Population and Housing Unit Counts.” Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, Washington, D.C., 2012. (Available online: <http://www.census.gov/prod/cen2010/cph-2-1.pdf>)
- U.S. Forest Service, Office of Tribal Relations. “Forest Service National Resource Guide to American Indian and Alaska Native Relations.” 1997. (Available online: http://www.fs.fed.us/spf/tribalrelations/pubs_reports/NationalResourceGuide.shtml)